

§ 1.3 なぜ SCE・Net を作ったのか

松村 眞（幹事）

私は 1998 年の 10 月に、60 歳の定年でエンジニアリング会社の日揮を退社した。退社後の計画は何も決まっていなかったが、自分の時間の三分の一はビジネス活動を、三分の一は社会活動を、そして三分の一は趣味を中心とするプライベートな活動に費やすという漠然とした方針は決めていた。したがってビジネス活動もフルタイムではなく、案件単位で調査やコンサルティング業務を受託することを考えていた。現役の頃から管理職向けのマネジメント研修も担当していたので、企業向けの研修業務もビジネス活動の一部に想定していた。フルタイムの就職を避けたのは、特定企業に所属すると活動の範囲が限定されるからで、定年後は独立した立場と時間の自由を確保したかったからである。

退社後の身辺整理が済んだ翌 1999 年の正月に、日本産業機械工業会の賀詞交換会で、旧知の間柄である綜研化学の中島社長（当時）と会った。そこでエンジニアリング会社を退社したことを報告すると同時に、大勢のエンジニアが退職の時期を迎えることと、彼らの社会貢献の場が作れないか立ち話をした。当時の定年は 60 歳が一般的だったから、退職しても健康で意欲があるのに、組織を離れると活躍の場がなくなってしまうからである。そこで退職したシニアエンジニアの潜在能力と、企業のニーズをマッチングさせる仕組みが作れないか相談した。その後、中島社長が幹事役になり、同じ思いの数人が綜研化学の会議室に集まって組織化の討議を始めた。ほぼ月に一度の会合は、中島社長、元東レの岩村さん、元 TEC の篠原さん、工業調査会の一色さん、綜研化学の齋藤さん、それに私の 6 名が中心で、毎회가侃々諤々の討議になった。論点は組織のビジョン、活動の内容、組織の形態、ニーズの把握、ビジネス活動とボランティア活動の区分、組織としての責任体制、費用の確保などであった。案件の確保と組織運営については、外部からも参考意見を求めた。今でもよく覚えているのは、シニアエンジニアを中心に設計会社を経営した元 IHI 役員の話である。彼の意見はこうだった。「退職した大企業のエンジニアはカナリヤである。誰かが餌と水を用意すればきれいな声で鳴くが、自分では餌を取りに行かない。文句は言うが建設的な提案も積極的な行動もしないから、カナリヤの組織化など止めた方がよい。使えるのはカナリヤではなく、自分で餌を取れる雀だ。」というものだった。

確かに案件を確保する営業活動が課題だったし、ニーズの有無も不確実だった。そこで顧客を法人会員として取り込む戦略を考え、シニアエンジニアが個人会員になって技術サービスを提供する仕組みを採用した。個人会員の責任と組織責任の区分も難題だったから、チェック体制を含む詳細な業務フローを設計した。この組織と業務フローの設計は私と綜研化学の齋藤さんが担当し、ときには激しい議論もあったが、目的意識を共有していたので今では懐かしい思い出になっている。このような約 1 年の準備を経て 2000 年の 4 月に発足したが、予想以上に個人会員の申し込みが多かった。また、当初から固定費の負担を軽減する目的で、オフィスを持たずにネットを中心とする活動の仕組みにした。しかし 2000 年当時はメールを持たない会員がいて、Fax で連絡していたのが懐かしい。ネットを中心にするという意

味で SCE・Net という名称にしたが、当時としては斬新なコンセプトだったと思う。その後の経緯については、日経 BpNet Second Stage の記事^(注) に詳しいので参照していただきたい。今は発足から 10 年が経過し、組織から離れたエンジニアに活躍の場を用意するという初期の目的は、かなり達成できている。これまでの書籍発行、教育、調査受託、技術コンサルティングは相当の件数に達しているであろう。SCE・Net という組織があって始めてこれらの活動が展開できたのである。

注) 日経 BpNet Second Stage

http://www.nikkeibp.co.jp/style/secondstage/jinsei/yaritai_060131.html

http://www.nikkeibp.co.jp/style/secondstage/jinsei/yaritai_060207.html

一方、企業の定年が延長されるようになり、結果的に会員の平均年齢が高くなった。このためもあって、現在は当初の目的だった外部活動への参加者が少なくなっている。しかし対外活動を展開して学会のステイタスの向上に寄与しないと、財務的な支援をしている学会や法人会員の協賛を得られなくなるであろう。組織目標に掲げた社会貢献の理念を守り、内部活動中心に陥らない運営を期待したい。SCE・Net の今後の主役は、発足初期の第 1 世代から次の段階世代に移行することになるだろう。発展を期待する。